自分を苦しめる"運命"に対してどうしていいかまったくわからん → それが無明というやつ P15

お経は葬式の唄ではありません P21
本来お経とは、人が生きる上で
気が付かねばならぬ仏の知恵の言葉なのです。

めいそうによって云恩の心は"空(くう)"の次元に到達する P47

② 般若波羅蜜多 P48

プラジュニャー(智慧)パーラミター サンスクリット語
"彼岸に至る智慧(ちえ)"の意……向こう岸に渡る事 P48
煩悩を吹き消した悟りの境地

般若(はんにゃ)とは?
プラジューニャー (サンスクリット語)
パンニャー (俗語のパーリ語)の音訳
生命の根源的なところに目覚める知恵 P51

波羅蜜多(はらみた)とは? P52 …彼岸にいたる事
① この世における波羅蜜多
② 死後の世界へとつながる波羅蜜多
↳死の後に続く意識の世界
バルドウ
霊界 副産物 生存中に働かせた悪い意識の
と行く かずかずが実体を持った怪物となり
本人におそいかかってくる

霊界に通り抜ける事を
"彼岸に至る"という事。

知識…
自分の外の世界から
かき集めて頭の中に
詰め込むもの

知恵…
生命の内なる働きの中から自然に
湧いてくるもの

知恵 "苦"から生まれる知恵
"空"から生まれる知恵

五蘊(ごうん)とは
五つの動的なあつまりという意味
それがイノチの働きのすべてをあらわす
色 = 肉体
受 = 感覚
想 = 感情
行 = 意志
識 = 認識

空とは
実体がない からっぽの何にもなし とかの意味を持つ P77

P77
般若心経全体の深い意味合いは、瞑想の感性をとうして理解できるものだということが経文のスタイルに表現されている
般若心経を理解するには瞑想が必要

P57の事

般若心経は方便で表わされているので大人でもわからない。ナゾの言葉だ。その方便を見ると理知は瞑想の感性の中に目覚めてくる。P70

2024 1/11 記

バルドウでの苦痛を P56
どう通り抜けるかの知恵を
今、生きている中で般若波羅蜜多に
目覚めておくことが大事
ただ、目覚めるには知識で
得られるものではない。
目覚める手段が空の瞑想

③ 色即是空

P.101

空のことばの もとは
シューニャター（サンスクリット語） sunyata
意味：何もない状態、あるいはゼロ
"色"は ルーパ（rupa）
意味：形あるもの、物質的現象

"空"の解釈が難しい。

step 1 P82〜P102 → 色とは空とは
step 2 P103〜160 → 空の脱線解釈

a) 色即是空 … 物質的現象は何もない状態
b) 空即是色 … 何もない状態がすなわち物質的現象

直訳すると、a) あるのにない
b) ないのにある　となる。

P117
空 … 神秘の実感とは 存在を超えて存在する 根源的なものの実感。
それが存在の法則性となって すべてをあらわしている。
それは空性なるもの。
そこで それを仮に"空"と呼ぶのです。

P127
空を観念の中でのみ納得したところで、
それが今、生きているこの現実生活の中で
何ひとつ生かされはしない。

P127
生きている限り苦しみや痛みからは逃れられない

P133
無明さえに"色即是空"の理解の脱線が起る。

脱線した色即是空で説明されることといえば
ある（色）ものがない（空）ものという
言葉の矛盾を理屈で矛盾でないものに
するだけのこと。
それを納得したところで人生の中に何の価値もあらわさない

P117
"空"≠"無"
色即是空が色即是無に脱線してしまった

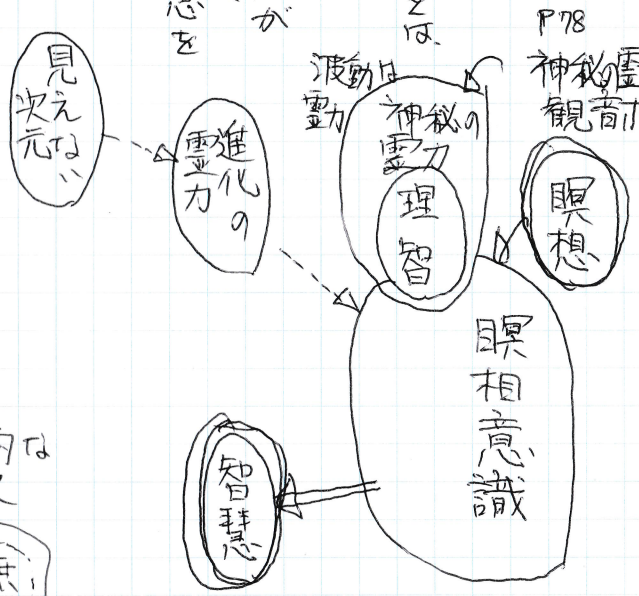
直訳的な解釈

P78 P38

瞑想と共に生まれてくる理智とは、
いのちの進化を押し進める
神秘の霊力のあらわれ
見えない次元の、進化の霊力が
瞑想意識の精神に働きかけ、
そこに霊的進化に必要な智慧を
生み出す

瞑想の行とは
静かに座って
呼吸を整え
心をキョロキョロ
させないところ
から始まる。
瞑想が深く
なると共に
思考は動きを止め
心はからっぽに
なってゆく。
我意識が消えてゆく。

②
[2]



P78
神秘の霊力を
観音ボサツと呼ぶ

P134
お釈迦様が人々を救うために
誰にも理解出来ないことを
教えてないない。

P136
空の瞑想によって根源的な
生命の動きが脳の中に自動的に起る！
それは、空なる次元に感応する感性を
目覚めさせ、そこから生命の実相を知る知恵が
生まれてくる。それが般若波羅蜜多だ。
"空なる次元は般若波羅蜜多によってのみ
理解されるものなのだ。

P140
空の実感とは無我の意識
↓
P140 "胎児"の時の意識

P141
母親の胎内で
胎児を育てていたのは、
"空"なるもの

空なるものが胎児の"無我"の
生命とつながり、これを守り育て、
やがて胎児はこの世に生まれ出る！
P142

P142
ここにおいての空なるもの！
それは生命の根源！
つまり神ともいえるし仏ともいえる。
生命の根源とは生命の法則！
すなわち生命条件の正しさ！

だが、人間は生まれてからのち
それぞれに我意識を持ち始める。
↓
この我意識なるものは一体、
どこから生れてくるのか?!
↓
その出発点は生命の"苦"だ!!
人間は生命の"苦"を体験すると共に
そこから"我意識"を作り出していく!!

P143
胎児は母胎の中では
生命の根源的な力に
守られていた。
そこには、ほとんど
"苦"がなかった。
だから"我意識"もなかった。
だが、胎児がおぎゃあ！と
生まれたその瞬間から
無数の"苦"が待ちうけている！
その苦と共に我意識が目覚め
"苦"の体験の中で我意識も育ってゆく

我意識……エゴ!! P143
何といっても人間ほど
強烈でゆがんだエゴを持つ生きものは他にいない。

P143
そして、このゆがんだエゴが常に問題を引き起す！
ゆがんだエゴ…それは我意識が生命の"苦"に
さらされ、ゆがめられたものだ。

P144

③ "苦"とは何か？

2024/1/18

あらゆる生命はそれぞれ生命法則と一致している時
正しくあり、一致しない時、生命の条件は崩れ出す。

生命の条件が崩れようとする時 生命が感応
するもの、それが"苦"だ!!
生命が生命にとって正しくない状態にと
追い込まれた時、それに反応して生まれる感覚が"苦"の意識。
そして、それが限界を割る時、その生命は
滅び去る。… すなわち死だ!

しかし生命には生きようとする根源的な働きが
常にある! そこに"我意識"なるものが生れてくる。
我意識も生きようとする生命の働きだ。
だが、その出発点は"苦"という正しくないものから生まれる。

"苦"は破壊のエネルギーだ。生命に生じた苦が
中和されない時、"苦"は怒りの意識に転じ
何かを破壊する!

怒りのエネルギーが外に向えば 他の生命を破壊する!
他の人の心を破壊する!
他の人との愛を破壊する!

怒りのエネルギーが外に発散されず内側にとどまると…
自分の心を破壊する!
自分の身体を破壊する!
自分の生命を破壊する!

"苦"がいったん怒りに変われば そのエネルギーは
何かを破壊せずには収まらないという恐ろしいもの。

P147

人間を不幸にする三大悪は、

怒り
むさぼり
愚かさ
愚かおろか

} 我意識そのもの(エゴ) → 自分を不幸にしている

特に"怒り"は自分の運命を決定的に悪くする!
人間は怒った分だけ間違いなく不幸になる!
怒りと不幸は絶対の法則性でつながっている!!

そこに気付かず心のままに怒り狂うのは愚かさそのものだ!
怒りの中には愚かさも貪りに ~~含ま~~ 含まれている。

したがって、怒りから生れた"我意識"は、それが必要以上に
働くところには常に愚かさがあり、貪りがあり、怒りがついてまわる。

"我意識"のうちわけが五蘊(ごうん)の中の"色"を抜いた③受想行識

③ 受想行識(じゅそうぎょうしき) 亦復如是(やくぶにょぜ) P150

苦楽の感受も 感覚に応ずる想念も 行動につながる意志や衝動も
それらを総合した認識や知識も、すべてが"空"なる次元の
根源的なもの~~を~~のあらわれである!

③受想行識とエゴ

P151

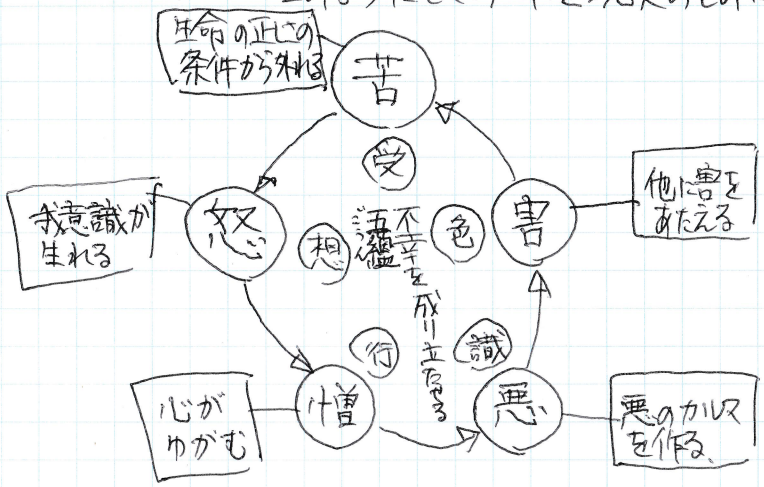
2024.1.29

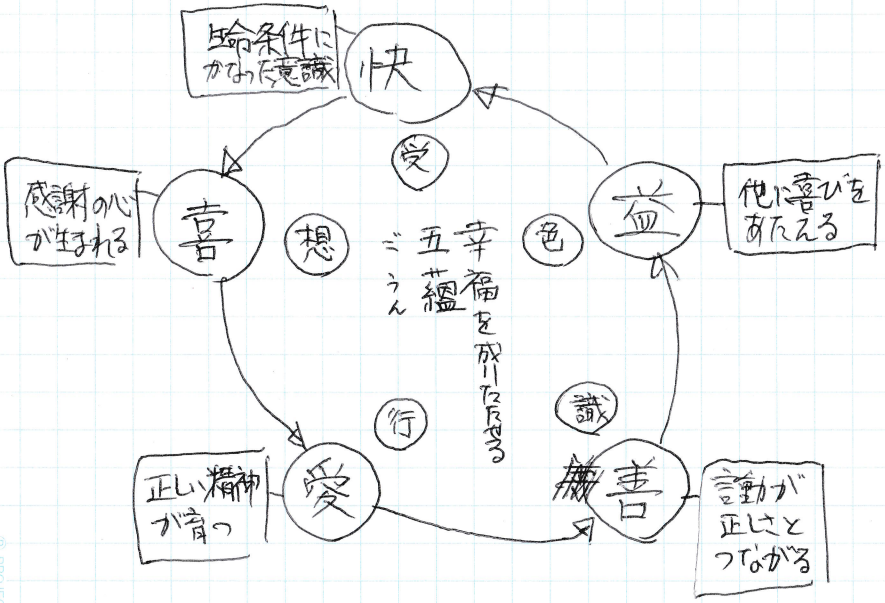
受想行識は生命の意識と精神作用のこと。心の動き全体のこと。

③

P153

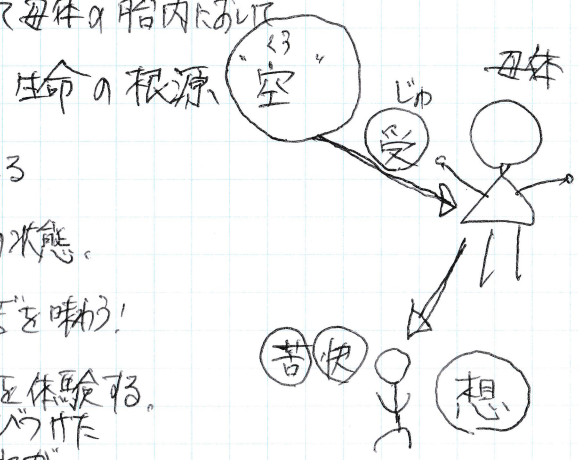
受想行識の中でゆがめられたエゴは
このようにして不幸を現実のものにする！





そして心の舞台となるのが
「色」(しき)、つまり肉体だ。

その肉体が色即是空、すなわち「空」(くう)なる次元の
根源的なもののあらわれとなって母体の胎内において
その生命を形成し始める。



そこにおいて生命はただ根源的なる
ものからの働きかけを受けるのみ！
すなわちそれが意識の「受」(じゅ)の状態。

やがて、おぎゃあと生まれる時に「苦」を味わう！
抱かれて「快」を味わう！
生しい生命は、さまざまな苦楽を体験する。
その苦楽と共に、感覚に結びつけた
イメージを持ち始める。すなわちそれが
意識の「想」(そう)の段階。

P152

そこから生命は他と自分とを分ける。意識を持ち始める。
自我が形成されてゆく。
そして自分の意志で行動を開始する！
エゴもここから生れる。すなわち、それが意識の「行」(ぎょう)の段階

「行」と共に生命はまわりからさまざまなことを知り始める。
原因と結果の関係や善と悪の区別や判断がつき始める。
すなわちそれが「識」(しき)への進展。

こうした意識の発展段階の中にそれぞれの生命の運命が作られてゆく。
特に我意識が「苦」によってゆがめられると、
その行動は本来の正しさから遠ざかり、さらに自らの「苦」を増大させ、
自分のまわりにも限りなく「苦」を生み出してゆく！
それがゆがめられたエゴの心のたどる運命だ。

P154
③ エゴは生命が"受想行識"の中で本来の正しさから遠ざかってしまったところに生じた人間の意識!!

P156
エゴという我意識は、
ガン細胞のようなものだ。
自分の存在を確立させるために
存在の条件そのものを破壊する。
そして自分も最終的に自滅する。
エゴもガン細胞も
そうした宿命を持っている。
今の人類がその傾向にある!

P156
この我意識を一時的にせよ押える行(ぎょう)
それが"空"の瞑想だ。
空の瞑想が実現されれば
意識は空を実感する。
空の実感とは一時的に我意識が
取り払われた状態だ。
そこには一切の我意識が働かない。
意識はあっても生命のもとの意識だけだ。
それは胎児が胎内にいる時と同じ意識だ。
正しい生命条件にあった時の意識だ。

~~[illegible]~~
P157 そこには本来の正しさがある。如来の正しさがある。
空の実感の中において人は再び如来とめぐり逢う。
生命は、空の次元を通して如来の力とつながる

そこに生命根源の働きが起る。
生命根源の働きとは、生命を正しく保とうとする働きだ。
ゆがんだ心を、もとの正しいものに戻そうとする働きだ。

我意識

我意識がゆがみ出せば運命を決定的な不幸へと傾けてゆく!!

- 醜い — すべての人の心を映しだす
- 愚か — 自分の心の醜さに気付けない
- 正しさを拒絶する
  - 正しさに対して怒りで立ち向う!
  - 間違いを、間違いのままに押し通す!
- 勝ち負けにこだわり、戦う心から離れられない
- そのすべてが生命の正しさから外れている。
- 出発点の"苦"をさらに増大させる。
- そこに正しさ(如来)の力と結びつくものなど何もない。

生命本来の正しさは、

それは生命の法則! 根源!!

西洋的に表現すれば 神の意志

東洋的にいえば 如来(にょらい)の法

胎児の"無我"はその法則と正しくつながっていた。
如来の法の正しさと共にあった。
だが我意識と共に如来の法との
つながりが切れる。
我意識の働くところに本来の正しさは
見失われてゆく。

そこで我意識はさらに間違いを重ね
なおも大きな"苦"へと自分の命を
進めてゆく。
そして、ますます心をゆがめ限りない
悪循環の果てにたどりつくところ!
それが、生と死を超えた次元での
地獄なのだ。

③ P157
そうした働きの中で理性が自分の心のゆがみに気付く！
自分の我意識の正体を見抜く！
そして、その愚かさと醜さを知る！

P157
理性の目覚めは知恵の目覚めでもある。
理性の中に自分の心のゆがみを正すために
必要な知恵が生まれてくる。
それこそが"般若の知恵"だ。

P158
般若の知恵とは 自分の心の傷を
自分の心のゆがみを正す知恵だ。
それに必要なこととして生死をも超えた生命の
根源的な実相に感応する感性が
自然に生命の中に目覚めるのだ。

P158
空の瞑想によって意識が空を実感すると
同時にそこに自らの魂の実感がある。
さらに自らの魂とつながった存在を超えた存在、
"空"なるものがある。
すべての根源！ "空"なるもの！

それは人格化されれば"神"。
人間の精神世界からとらえれば如来(ほとけ)(仏)
あるいは聖霊とも呼ばれる。

解釈1
P159
人間の精神世界の根源は
"空"なる次元の如来の一大心霊である!!

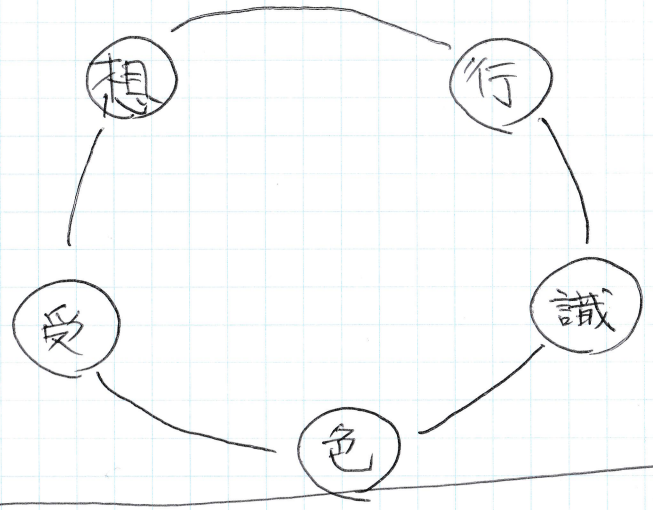
そして我々一人ひとりの魂も"空"なる次元において
ひとつひとつの霊である！

そして我々の霊性は 大心霊の分霊として
"空"なる次元において如来の一大心霊とつながっている。
それは別のものではない！

解釈2
P159
我々のさまざまな心は"空"なる次元の霊性のあらわれだ！
受も想も行も識も"空"なる次元の根源的なものから
我々が現実と感ずるこの"色"(しき)の世界へ
あらわれているのだ!!

P159
受想行識亦復如是(じゅそうぎょうしきやくぶにょぜ)

P159



P161

④ 不生不滅

P162 観音菩薩が舎利子に語りかける表現は
つまり、方便といわれている。

瞑想と共に人間の生命の奥から
"空"の次元を感応する能力が自然
に生まれてくる。 ― 仏の教え

P164 諸法空相と運命について

すべての出来事には必ず原因と結果がある P166

原因をたどるとたどりつくところは自分自身だ P169
あらゆる不幸あらゆる不運の原因は
実は自分自身にある!

殺された人も自分が災難に逢うという、
その原因をこの一生の中でなく前世に
作っているとすれば、本人にも、誰にも
災難に逢う原因がまったく分からないことだろう。
悪い結果には絶体悪い原因がある!
その責任は常に本人にある!!
不快なことに出逢うということは
いつか、どこかでその原因を本人が
作ってしまったということなのだ。

カルマの法則

あらゆる現象は存在の法則性の中からあらわれ出る。
その現象そのものはさまざまな姿で増減を繰り返すが
その現象をあらわす存在を超えた存在は増すこともなく
減ることもない 永遠不滅なる超存在。

たとえば超存在を地球全体の水だとすると
海の水は太陽に熱せられて蒸発し大気中に漂い
その分だけ海の水は減るが大気中の水は増す
その水は雨となって地上に海にかえってゆく。川の水も増えたり減ったりしながら海に戻る。
水は海で、大気中で、川でそれぞれ増えたり減ったりはするが、地球全体の水の量としては常に変わらない! 不増不減だ。

P174
生命の条件"宿命"

P175
過去の原因が現在の結果となってあらわれ
現在の原因が未来に結果となってあらわれる
それこそが宿命と共にある諸法空相!!

"空なる次元"の霊は
不生不滅の存在である

"空なる次元"の"魂"の本質は
汚れや清らかさを超えている

P192
不生不滅　不垢不浄　不増不減

P192
すべての現象は空で実体のないものだから
自性で生まれてくるものなど何ひとつない。

生まれてこないのだから滅びることもない。

何もないものがよごれる訳はないしきれいなはずもない。

何もないものが増える訳はないし減るはずもないと…

その生命体はある時、生れそして死ぬ。さらに来世に生れ生と死を繰り返す。
しかしそれをあらわす霊性の本質そのものは生も滅も関係がない。
"空"の次元の霊の本質は生滅を超えて不生不滅の存在だ。

人間の心を"空"なる次元にたどってゆくと魂になる!
魂が"空"なる次元から人間の脳と結びつき心となって働いている。
そこにおいて心はまわりの条件と共にある人は穢く汚れ、
ある人は清らかさを保ち、あるいはその時々に応じて
さまざまに変化する。
しかし心を創出している魂そのものは汚れや清らかさの以前にあり
そこにおける魂の本質は不垢不浄である。

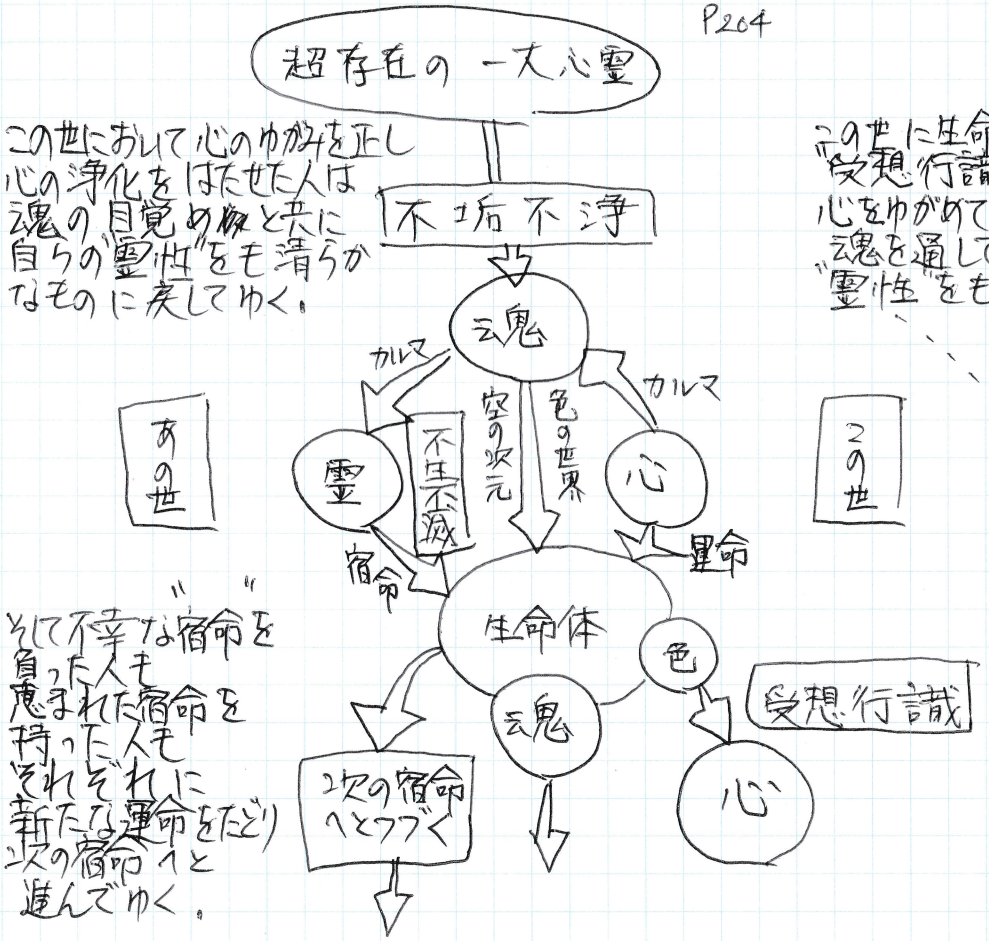
P206

④ お経のウラに秘められた生命の実相

[9]
2024.2.4

お経の言葉は方便で書かれてある。
いわんとすることは常に言葉のウラにある。

P204



この世に生命体(色)をあらわし"受想行識"の過程の中で心をゆがめてしまった人は魂を通して空なる次元の"霊性"をもゆがめてゆく。

その"霊性"がそのまま次の一生の出発点、すなわち"宿命"となる!

そして不幸な"宿命"を負った人も恵まれた宿命を持った人もそれぞれに新たな運命をたどり次の宿命へと進んでゆく。

人間は死んで、それですべてが終りになるのではない!!
という自覚から自分の心の持ち方に責任を持とうとする精神が目覚めるのだ。

心しだいで肉体は健康にも不健康にもなる!
心の選び方はそのまま"その人の運命を左右する!

I 10 I
2024.2.6
2024.2.7
2024.2.8

P206

⑤ 是故空中 無色 …

訳

⑤ この故に、空においては形あるものはなく、
"いのち"と、その働きもなく
眼も耳も鼻も舌も意(こころ)もなく
色も声も香舌(かおり)も触(しょく)も法もなく、
限界から意識界のすべてがない！

⑥ 無明(むみょう)もなく、無明の尽きることもなく
老死(ろうし)もなく、老死の尽きることもない！

⑦ 苦(く)もなく、苦の原因もなく、
苦の滅もなく、苦から逃れる道もない！

P210

空 ① 色の世界における"空"

② "空"の次元そのもの

パーラミター (波羅密多)

① 彼岸に至れる状態の意味

① 現実世界(色)のパーラミターで、これは
煩悩をふき消す悟りのこと

② 魂が進化して涅槃(ねはん)に致達する事

空① 内容 P211

すなわち、そのひとつは、現実世界における瞑想で体験する
"空"の実感！

"空"を実感する時、意識は"意識のもと"のもののみとなる。
⇓
そこに身体の存在の意識が消える…心の働きも消える
⇓
生命の外、内という区別もなくなり意識は、"空"の実感だけになる。
⇓
その実感の表現が、
是故空中無色　無受想行識　無限耳鼻舌身意
無色声香味触法　無限界　乃至無意識界
なのである。

空② 内容 P212

そしてもうひとつは
魂の霊性が生死の輪廻の束縛から
開放されるまでに進化した"空"の表現だ。

もはや、そこにおいては魂の霊性は肉体というものに
むすびつかない

したがって、そこには"受想行識"もない。
感覚器官も、その対象もない。
そこは この世に存在するあらゆる現象を超越した世界だ。

P213

しかし結局のところ言葉で"空"をいかに説明しても無駄。
"空"は実感する以外とらえようのないものだから
例えばお湯を温度計で正確に何度と計ってみても
その温度の実感は手をお湯の中へつっこむ以外に
わからないのと同じだ。

P214

"空"は頭や知識では知りようのないものだ。
"空"は生命の実感以外にとらえようのないものだ。
⇓
生命の実感を通して初めて"空"を知ることが出来る。
⇓
"空"の実感は"空"の瞑想によって得られる
それこそが般若波羅密多の行だ！

⑤是故空中無色…

P215

空の瞑想

"空"を実感するということは"空"になりきることである。"空"と一体になることである。
それは
神と一体となることであり 仏と一体となることであり 霊と一体となることである。
そして、それこそが魂の自覚につながる。

P222
瞑想というのは"空"の実感だ。
"空"の実感とは この世を超えた
超次元というものの実感。
すなわち、瞑想による"空"の実感と共に
精神の本質意識が目覚めてくる。

↓ 意識の内わけ

P223 わたしたちの意識の内わけ というのが
受想行識 という言葉で表現されているが

↓

しかしわれわれの日常のこころというのは
受 も 想 も 行 も 識 も
なにもかもがごっちゃになって
何が何だかわからんという状態だ

P225

究極の"空"とは 存在を超えた
目にも見えない巨大な"超意識"だ
その"超意識"は、自らをあらわそうとする。
根源的な"意志"を、空なる次元に波動させ、
その"意識"の波動の中に物質次元の原子を形成し、
やがて、そこに"色"なる宇宙が姿をあらわした!

仮に一大心霊と呼ぶ

一大心霊

宇宙こそ
いのちの
進化の舞台

いのちこそ
一大心霊の
進化の意志
のあらわれだ!!

空

根源的存在の法則

霊的進化の波動

P229

一大心霊
‖
空
∧
超意識の波動
‖
感覚
‖
色

"いのちの
第一段階
"感覚"

P229

宇宙という物質世界が
あらわれた時、さらには
地球という"いのち"の舞台が
そこに作り出された時、
同時にめざめた意識が
"感覚"(かんかく)という
物質次元の"いのち"の
世界だ!

それが物質世界における
圧迫! まさつ! 打撃! さらに
熱さ、膨張、冷たさ、収縮など
生ものの"快"と"苦"につながる
基本的な"いのち"の意識ということだ。

P230

その"感覚"という
"いのち"の働きの中から、
"欲望"という意識が
めざめることによって
地球上に生きもの"が生まれてくる!

欲望から生きものが生まれ
生きものは"欲望"を満たそうとする
意識を発達させ、そこに"いのち"の
進化が始まったのだ!

P230

いのちの
第二段階
"欲望"

⑤是故空中無色…

いのちの進化段階

1段階　感覚
2〃　欲望
3〃　感情
4〃　精神のめざめ
5〃　魂のめざめ

P231
いのちの第三段階
"感情"

P232
いのちの第四段階
"精神"のめざめ

いのちの第五段階
"魂"のめざめ

P231
進化の第三段階に至って
"生きもの"は欲望につながった
感情という意識をめざめさせてゆく。

動物の世界を見れば分かる通り
進化していない動物の感情は、にぶい！
進化するほどに感情も発達してゆく！

だがそこには精神の働きが見られない。
だから動物は欲望と感情のままに生きている。

P232
人間が地球上でもっとも進化した生物だといえるのも
この"精神"をいのちの中心としているから。

たとえば感情的な人間は感情のままに怒り狂ったりする！
それは、そのまま人間の精神の低さのあらわれなのだよ。

P233
精神が成長すれば、自分の怒りの感情というのが実は
自分自身の愚かさから生まれていることが、"いのち"の実感
で分かってくる！
だから、自分の怒りの感情を制するための精神の力を働かせる。
たとえ自分の心に怒りの感情が生じようとも精神が、
それにふりまわされないようにする。
その"いやな心"を、自ら切ってすてる智慧(ちえ)を働かせる。

P234
ところが、そうした精神の力が働かない進化のレベルが
感情中心の人間だ。
人間が、この世において、なさねばならぬ、もっとも大切な事!!
それは、自分の精神を、確かに目覚めさせ、それを魂の
次元へと高める事だ！それが進化の方向だからだ!!
感情と欲望の世界へ、逆もどりしてはならないのだ！
それは進化の逆流だからだ!!
それをやると、運命は"苦"の方向に動き出すのだよ！

P235
精神の進化の第一歩として
まず、怒りの感情にとらわれてしまうような精神であってはならぬ!!
という自覚を持てねばならない。

その自覚が、ほんとに持てれば、
その時、精神は、いつのまにか
自然に成長し進化していく。

P236
肉体生命の世界におさかえるなら…
肉体生命の全体を一つの"霊"として
そこに働く"脳"が"魂"という
感じだ。

P237
"魂"と精神もともと別のものではない。

"空"の次元の魂の意識が、
"色"の世界に降って、そこにあらわれ
てくる意識が精神と呼んでいるものだ。
もともとをただせば同じ意味ではあるが、
その存在の次元が違うのである。

P237
つまり"魂"が肉体生命という
条件を宿命として、そこにおいて
あらわしている意識が
"精神"なのだよ。

P236
魂というと何やらつかみどころのない
漠然としたもののようだが、
"魂"とは人間の霊性の個々の意識だ

⑤無眼耳鼻舌身意…

P238 無眼耳鼻舌身意　無色声香味触法
無眼界　乃至無意識界

P239 無とは、"我"の意識を無にした状態！
それは、瞑想の意識！
つまり無とは瞑想意識をさし示している

P239
つまり、目や耳や鼻などの五官(ごかん)の働きも、
それに連なったさまざまな思いも、すべて
"いのち"の外に向けられている意識だ。
"我意識"もまたここから生まれている。

P239
我意識というのは物質世界に生きる肉体生命の
生存を確保するために働いている意識なのだから
その意識の働きが外に向かうのは、
宿命的なものなのだ。

® PROJECT PAPER okina

⑥無無明亦無無明尽…

[4]
2024.2.17
2024.2.19

⑥経文の深ぼり。

P240
無明もなく無明のつきることもなく
解 無明から老死に至る十二因縁もなく
釈 老死や十二因縁のつきることもない

⇩

P240 実は、生死をこえた宿命や運命につながる
"十二因縁"や"六道輪廻"などを
正しく理解せよとうながしているのだ

十二因縁とは
"無明"が原因となりそこから色々な縁をめぐって
"老死"という結果に至るつながりを
十二の段階に分けて説いたもの。

それを十二因縁というが お経では
それを略して"無明乃至老死"と表現されている。

P247

天界
人界
修羅界
畜生界
餓鬼界
地獄界

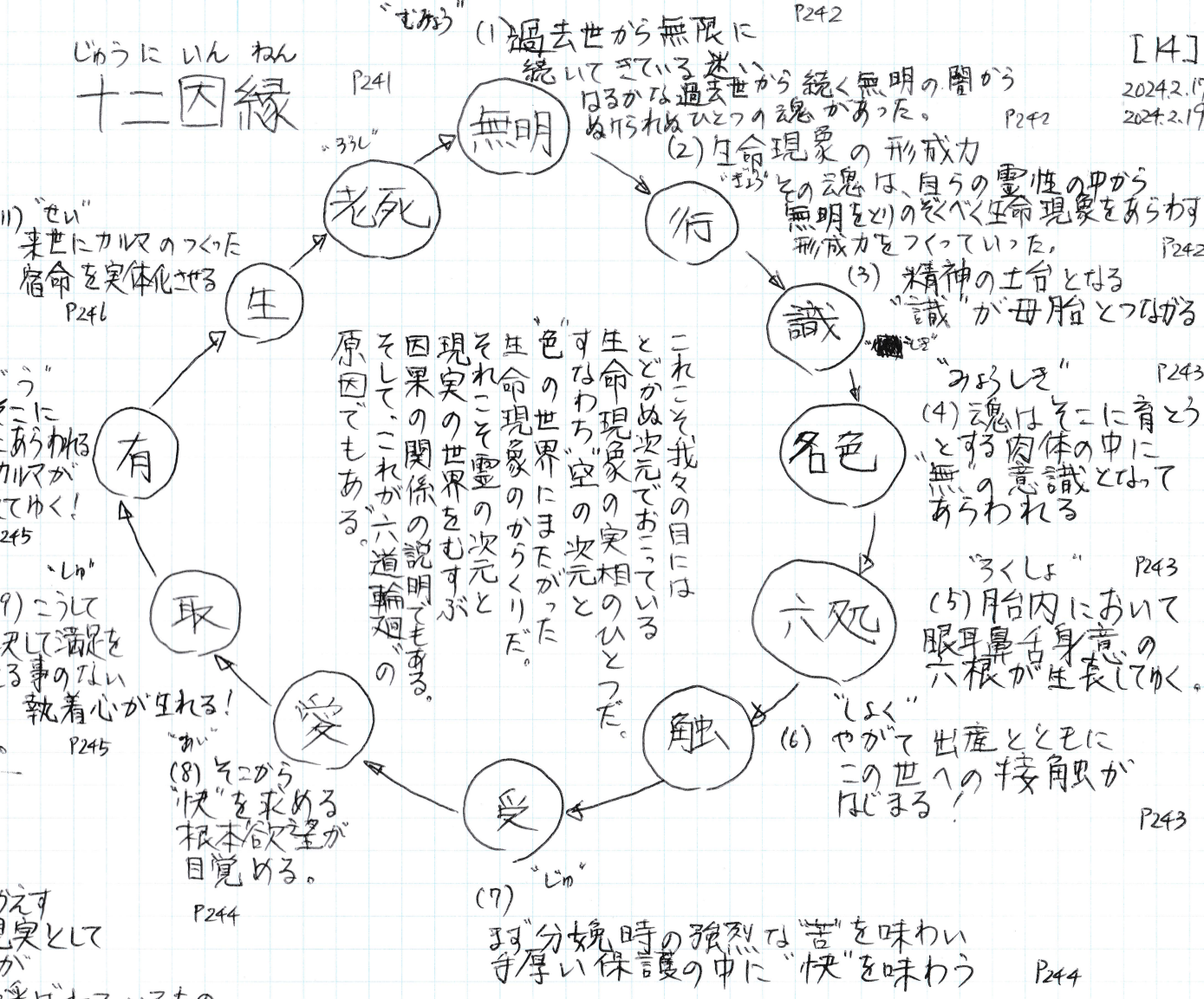
六道

P247
十二因縁をめぐって
生死の輪廻をくりかえす
無明の"霊"が現実として
あらわす生命現象が
"六道輪廻"と呼ばれているもの。

P247
人間の魂に無明のカルマが宿るかぎり
死んでも又 この六界のどこかに
生命現象をあらわし、それを現実として
味うのだ。

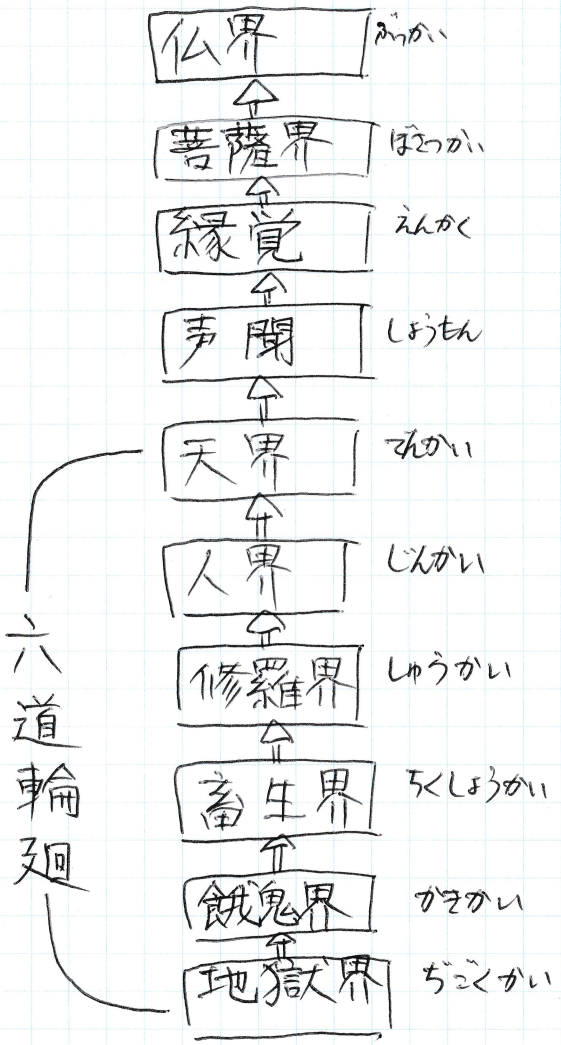
じゅうにいんねん 十二因縁

P241

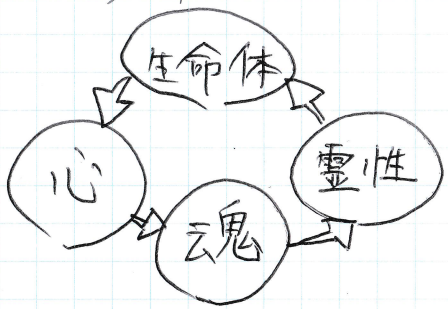


⑥ 無無明亦無無明尽 …

P252



P252
心は魂を通して霊質をつくり　その霊性が魂を通して生命をあらわす。
そして、その生命体をとおして魂が心となってはたらくのだ。



P253
人間はひとり残らず"人界"の霊性の中から
生まれてくる。そしてこの世で、人間としての
心をはたらかせつつ生きてゆく。
しかし、その心にも"十界"がある！
その心のありかたによって"空"の次元の
霊性も変化してゆく。

P253
心がこの世で天界さらにボサツ界へとむかう時
その霊性も"空"の次元で"光"の方向に進化してゆく。
そして最終的に如来の魂へと到達する。
しかし心が怒り"むさぼり"おろかさ"から
ぬけられないと魂の成長は止り霊性は低下し
修羅界、地獄界へと逆戻りしてゆく。　P253

P254
怒りの心は自らの霊性を"修羅界"へとかたむける

むさぼりの心は自らの霊性を"餓鬼界"へとかたむける

おろかな心は自らの霊性を"畜生界"へと退化させる

その霊性が心と共に固定されればその一生が終り
あらたな生命をあらわす時とその生命は
現実としての修羅界、餓鬼界、畜生界に生きる事になるのだ。

P255
怒りの心　むさぼりの心　おろかな心　が人間の運命を
不幸にみちびく三悪である！と云われるのもこうした理由からだ。

それは運命ばかりでなく未来の永遠に続く
宿命にもつながっているのである！

すなわち、三悪の心のゆきつく所は地獄しかないのだ!!

⑥無無明亦無無明尽…

P264
修羅界の霊性

P264 修羅界へと傾きつつある
霊性の特徴は戦いの心!!
その原因となっているのが
異常に強い我意識だ!!

P265
- 勝ち負けや優劣にこだわる!
- 人の話を客観的に聞くことが出来ずことばを常に対立させる
- 怒りから心がひねくれすなおさに欠ける

P266
- 自分を常に認めさせたいという心につらなってねたみや嫉妬心が強い。
知性がともなえば適当にそれもかくせるが
畜生界の無明が重なるとみにくい嫉妬心を
平気でさらけ出してしまう!!

P266
修羅界は地獄界へと落ちる入口だ!
そこではたらかせる怒りの心が自分と
自分のまわりに地獄を実現させる
"気"をたかめてゆく

P267
畜生界の霊性

"畜生界"の霊性の特性は無明の心

人間として生まれながら人間として目覚めず
人として生きながら愚かな動物と変りない未熟な精神
それが"畜生界"のなごりをとどめた人間の霊性だ。

"畜生界"の人間は自分をふりかえれない。
自分の愚かさに気付けない。
無明さゆえに理性なく感情を主体にして生きる。

P268
合理的な判断能力に欠けるため固定観念にとじこめられる。
ものごとの意味を問いなおせない。
固定観念のワクから一歩も出られず
どうしようもないかんこ者になる。

"畜生界"の魂はまだ幼い。"人界"の魂にまで育っていない。
そうした所から世の中のコテカン族の中には、
一見善良に見える心で生きるものも多い。
だが、そこにはかしこさがない。
そして一番始末の悪いことには、自分の愚かしい固定観念を
確固たる信念で人に押しつける。

多くの若者や多くの子供がそのぎせい者となって
心をゆがめていくのだが、コテカン族にはその原因が
自分の側にあるなどとは夢にも思えない。

そこに救いようのない無明さがあるのだ。

P269
世の中のひねくれ者や犯罪者をつくり出している張本人が、
実はコテカン族なのだ!

そうした事実をふりかえれず、自分達が生みだしたひねくれ者や犯罪者や
性格異常者に対してひたすら怒るのもコテカン族の特徴だ。

コテカン族の魂は畜生界につながった無明の霊性だ。
無明の感情とかんこの中で怒り狂う。

その怒りはさらに霊性を低下させ魂は天界へと進めず
修羅界、餓鬼界へ脱線してゆき地獄へと逆もどりしてゆく…

⑥ 無無明亦無無明冬…

P270

餓鬼界の霊性

"餓鬼界"の霊性はむさぼりの心!!

限りなくむさぼり決して満たされる事なく
むさぼる程に苦脳を大きくし魂をみにくくしていく
あさましい生命! それが"餓鬼界"の心。

餓鬼界の霊性は修羅界の敗残者だ!
恥も外聞もなくしてしまっている。

P271

物質的な損得、金銭的な損得が
目先さからはなれられない。
その事のためには平気で心の醜さをさらけ出す!

人間の心が健康であればいかにも醜い行為や
いかにもあさましい行動は魂がゆるさない。
しかし心が餓鬼界へとかたむくと、魂の価値に対して
鈍感になってゆく。魂の清らかさより
いかに醜くあさましくとも自分の欲望へと心を動かす。

小さなトクを得るためにかけがえのない魂を売り渡す
それこそ救いようのない餓鬼の魂だ。

P272

地獄界の霊性

怒り、おろかさ、むさぼりの心から
霊性は地獄の相をあらわしはじめる

常に苦悩があり 常に苦痛があり 常に何かにおびえ
そうしたことから逃れるすべもなく ~~生きのびる~~
生きる喜びも見出せない…
まっくらな人生 みじめな生命…

⑥ 無無明亦無無明尽…

P273

人界の霊性

みずからをふりかえろうとする意識
それこそ人界の霊性だ。

あらゆる人間の霊性は人界にあり
そこから人間という生命をあらわしている。
そして人間として生きつつ、あるものは
畜生界の無明からぬけ切れず
あるものは修羅界、餓鬼界、へと心をゆがませ
また、あるものは人界において生命の意味にめざめ
そこから天界さらにはボサツ界へと
みずからの魂を進化させてゆく。

P274

すべての人間の心の中にはぬぐいきれないおろかさと
むさぼりと怒りがある。そうした心がまったくない!
という人などほとんどない。
問題はそうした心をふりかえれるかどうかなのだ。

餓鬼界の心で生きながらそれをふりかえれなければ
魂は餓鬼界に定着し未来の宿命を餓鬼界の中に
実体化させてしまう。
畜生界の心も同じこと、修羅界の心も同じこと。

自らをふりかえることによって自分の愚かさ、
みにくさ、まちがった心の働かせ方に気が付ける。
そこから魂の前進も可能になる。

P275

だが霊性が畜生界にあるうちは無明さゆえに自分をふりかえれない。

餓鬼界の霊性はむさぼる心に忙がしく自分がふりかえれない。

修羅界の人は怒りとたたかう心とで自分をふりかえれない。

人界にいたってふりかえりの能力を身につけた時、
人間は自分の生命の意味に気付きはじめる!
そこから人間本来の理の性が育ち出す。
そして、生命現象の根源なる霊魂の実相を知りはじめる。

⑥ ~~無無明亦無無明尽~~ …

P276
天界の霊性

天界とは精霊の世界
すなわち神々の世界である。

ここで神ということばの意味を
はっきり理解しておく必要がある。

~~キリスト教~~
仏教にあらわれる"神々"は
キリスト教やイスラム教で表現されている
神とは意味が異なる。

キリスト教やイスラム教の神は仏教の説く"空"の人格的表現、
あるいは聖霊的なものをさすが、仏教の中の神々とは
天界の次元の精霊のことだ。

P277
東洋においては（日本においても）精霊をさして神と呼んだ。
山や海、その他あらゆる自然現象の奥に働く力が
精霊でそれを人格化して神々と呼ぶ。

したがって、大地の精霊、海や山の精霊、風の精霊など
東洋にはたくさんの神々が存在する訳だ。

P278
そして仏教ではそれらの神々を人格化した仏像で表現している。
それらの仏像は"天部"と呼ばれている

これらの天界の神々は古代インドのバラモン教やヒンドゥ教の
神々の他に竜神や稲荷や天狗、さらには
権現や八幡神なども天界における精霊である。

P279
以上のように霊性が地獄、餓鬼、畜生、修羅界、
人界、天界の六つの世界のどこかに属している間は
生と死という輪廻の束縛から逃れることはできず
霊魂は延々と六道輪廻を迷いつづける。

天界の精霊も迷いの世界にあり、その霊性が完全に進化しないうちは迷いの世界にいる。

P279
神話にもでてくる神様が怒り狂ったり、やきもちをやいたりする。
たたりをもたらす低級な心の神々もある。

P280
そうした不快な現象をあらわす神々はその霊性が進化しきってないからだ。
高い霊格に昇華した精霊や聖霊はそのような俗っぽい心で
人間世界に災危をもたらしたり人の心をわずらわしたりはしない！

P281
だが人間の生命も、その進化も決して人間の世界だけで成立っているのではない。

あらゆる森羅万象の法則性の中のひとつとして人界という生命現象が存在する。

我々の目には見えなくとも、常にさまざまな精霊が私達の存在とつらなって
はたらきかけている。我々の生命をささえてくれている。
私達の魂の進化に大きな力を送ってくれているからだ。

そうした事を実感したとき私達人間は天界の精霊に対して
深い感謝と敬意を払わずにはいられない。

⑥ 無無明亦無無明尽…

P282 涅槃とは この六道輪廻から魂が完全に解放されることだ。

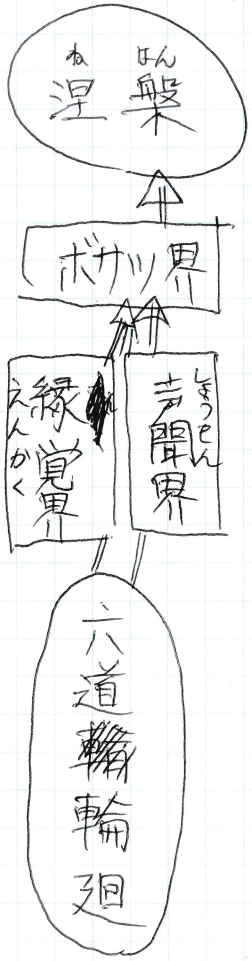
六道輪廻から解放されると魂はさらにボサツ界から
如来の次元へと進化してゆく。

その過程において声聞界と縁覚界という魂の目ざめの段階がある。

P283 声聞界とは
仏教の教えを聞き それを理解するところから悟りにむかう世界だ。
教団の中で修業にはげむ人々や教団に接する中から
仏の教えを理解してゆく人々が声聞界だ。

縁覚界は、
独覚とも云い、自分の生命の感性の中で直接天界の精霊や
如来の聖霊とのつながりを得、そこから自然に悟りの道へと
あゆみ出す人々のことを云う。

人によって声聞、縁覚とわかれるのは
その人その人の霊性や霊質にもより、さらに
その人の魂とつながる精霊や聖霊の霊格などにも関係している。



⑦ 無苦集滅道

P285

四諦の真理（したいしんり） ← 四つからなる"いのち"の真理

- 苦諦（くたい） — 肉体的生存は"苦"であることについての真理
- ~~集諦~~ 集諦（じったい） — "苦"の原因と成り立ちについての真理
- 滅諦（めったい） — ~~苦についての~~ "苦"の消滅と悟りの世界についての真理
- 道諦（どうたい） — "苦"の消滅に至る道についての真理

P286

四苦八苦ということばがあるが まず"生老病死"が四苦だ
さらに 愛別離苦（あいべつりく） 怨憎会苦（おんぞうえく） 求不得苦（ぐふとっく） 五蘊盛苦（ごうんじょうく）
の四つを加えて八苦となる

- 愛別離苦：愛するものとはいつか何らかの形で別れねばならぬ苦しみのこと
- 怨憎会苦：怨みや憎しみの対象に会わねばならぬ苦しみ
- 求不得苦：求めても得られぬものを求めるところに生まれる苦しみ
- 五蘊盛苦：肉体と感情のはたらきが盛んになればなるほどそれに伴って欲望もふえ それが苦につながってゆく

P287

すなわち、"生きる"ということには常に"苦"がついてまわるということを見極めた真理が"苦諦"である ☆ → 以後 [26] まで 苦諦の解説

P289

自殺は"空"の次元の法則性を知らぬ無明人間のやることだ。
その無明さゆえに生と死のくりかえしを延々と続ける。
この世の苦悩から逃れようと自殺をするのに
その繰は今より更に苦しい人生を次の一生に実現してしまう。

自殺は何の解決にもならないばかりか
さらに大きな苦しみを負うカルマを作り出すだけなのだ。

⑦無苦集滅道

P291
生命の意味にめざめ"無明"の闇から
脱出するには、まず"生存は苦である"
という真理を正しく理解できなくてはならない

P292
"生存は苦なり"という"苦諦"の真理の奥には
"生老病死"などという目に見えている苦の他に
もっともっと深い意味が秘められている

P293
それは"空"の次元とつうなった苦"だ。

つまり魂の目がまだ開いていない人にむかって
空の次元の話をしても通じない。

そういう人々にはとりあえず"生老病死"という
色の世界の苦に目をむけさせる。そして
そこから根源的な"苦"という生命の深い意味に
目が開くきっかけをつくる。
これ、また仏の知恵の"方便"なんだよ

P294
すなわち"空"なる次元の我々の"魂"というものが
いかなるものかということを知れば、この"生存"という
生命の状態が根本的な意味において
"苦"を土台としてなり立っているということが理解できる。

P295
そう！人生の"苦"から脱出するには"苦"そのものの意味が分からなくてはならない。
苦の意味も分らずに苦の中でもがくから苦の堂々めぐりをしてしまう。

"苦"の意味がほんとうに分れば それに対応する知恵が自然に生れてくる。
諦めの意味も分る！それこそが般若の知恵!!
そこに悟りへの第一歩がある！

P296
☆低我（我意識）と真我（魂）

自分というひとつの自分の中に
三つの自分がいることに
気付くはずだ

P296
① まず、肉体という自分がある
② その肉体の感覚につらなって
欲望と感情という自分がある
③ さらにその奥に
知性と精神という自分がある

P297
人間はある時期まで この三つの（①～③）
自分の意識をごちゃまぜにして働かせ
それを自分自身だと思って生きている。

ところが瞑想などで魂の意識が目覚め始めると
実は、その三つの自分は本当の自分じゃないと
気付き始める。

そうした三つの自分のさらに奥にある
魂の意識こそが真の自分であることに
気付き始める。

⑦ 無苦集滅道

P298
そして、その、魂の意識をさらに"空"の次元へと
たどってゆくと…
最終的にはすべての根源、一大心霊なるものに
つながっていることを実感する。
そこにおいて自分の魂とは一大心霊の分霊であり、
両者は別のものではないのだと知る。

一大心霊と自分の魂が別のものでないということは
一大心霊を知ることが自分の魂を知ることにつながり
自分の魂を知ることが一大心霊を知ることに
つながっている訳だ。
なぜなら、両者は本質的には同じものであるからだ。

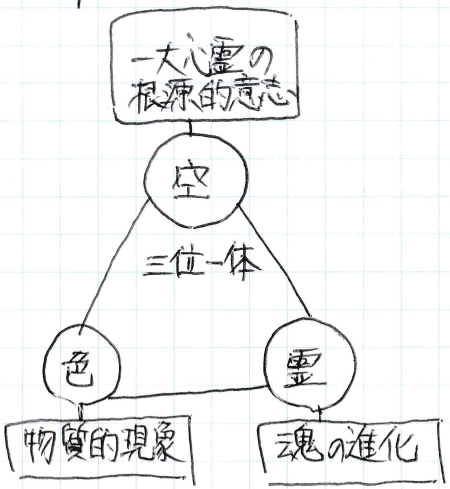
P299
すなわち魂が三つの生命の働きと共にあるように一大心霊もまた自らを
三つの働きの中にあらわしている。

(1) まず一大心霊は宇宙に"色"という物質的現象となってあらわれる

(2) そして、そこにさまざまな生命形態を生み出す。

(3) さらに、そこに自らの分霊をつなげすべての生命を
自分自身と同じものへと進化させてゆく

P300



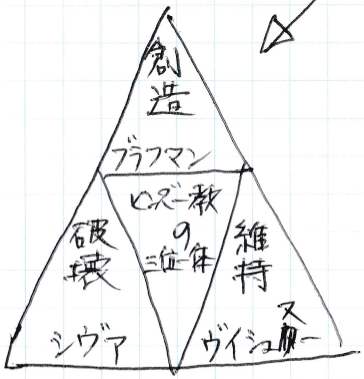
[23]
2024.2.29
2024.3.3

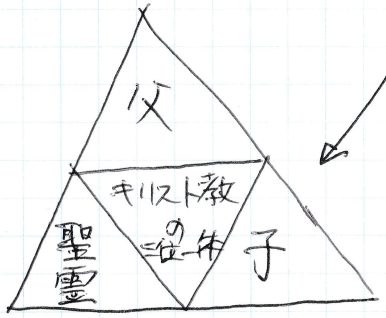
この一大心霊の意志の三つの
あらわれ方が"三位一体"(さんみいたい)
といわれているものの根本の姿。

それは宇宙という現象の中で
創造、維持、破壊を限りなく
繰り返しながら一大心霊から
分かれたものが自らに目覚め、
進化し、そして根源なる一大心霊
へと戻ってゆく姿だ。

2の"三位一体"の原理をキリスト教
では父と子と聖霊と表現し

ヒンズー教では、ブラフマン、ヴィシュヌ、
シヴァという神々で表現している。





P301
さらには、聖音といわれる"オーム"(AUM)もまた"三位一体"を
呼気の中で表現している。

そうした三位一体なる一大心霊の分霊のひとつひとつが
我々の"魂"なのである。

⑦無苦集滅道

P301
ではもう一度、自分の中の三つの生命の
働き方を振り返ってみる。
実に、我々個々の魂もまた
一大心霊と同じことをやっている事に気がつかる。

P302
(1) まず魂は色の世界の物質的現象として
肉体という生命となってこの世にあらわれてくる。

(2) そして、肉体の感覚とつながる欲望を働かせ、
そこに感情という生命の働きを作り出す。

(3) さらにそこから理性と精神を低い状態から
高いものへと育ててゆき、そしてそこに
自分自身を目覚めさせる！

P303
すなわち個々の魂は一大心霊から分かれて
想像を絶する長い長い時間の中で
生と死を繰り返しながら進化しそして最終的には
一大心霊そのものへ合体すべく成長してゆく。

魂が肉体を持つということは肉体を利用して
魂が進化するためだ。

肉体は魂が進化をはたすための目覚めの場なのだ。

だが、その肉体の生命は人間の本質の魂からは
はるかに低い生命状態だ。それは魂の進化と
共にいずれは切り離さねばならぬ
ものなのだ。

その過程において魂は肉体の感覚を自分だと思い
欲望や感情を自分だと思い幼稚な理性や
精神を自分自身だと思い込む。

P303
これこそ低我と呼ばれるエゴの意識

P304
低我というのはたしかに自分のようであって
実は自分でない という不思議で
けったいな生き物

たとえば
○肉体という"低我"は肉体のレベルで、常に
自分の求めるものに向かって動こうとする
習性がある。時として精神の命令をも
無視することさえある

それは、乗っている馬が主人の行きたいところへ
行こうとせず道ばたの草を食うために
脇道に勝手に入ってしまうようなものだ。

実生活の中でも肉体が心に返して
勝手に動いてしまうことは、誰しもが
経験しているはずだ。

P305
○感情という"低我"は常に欲望と共にあり
限りのない満足を求めてさらに欲望に突走る。

そして欲望とつながった低いレベルの知性や
精神は肉体や感情を満足させるために
ひたすら悪知恵を発達させる。
そして、そこに限りない欲望と執着を作ってゆく。

ここで、もう一度魂の全体像を眺めてみると、
魂を境にして上は一大心霊とつながり
下は肉体を中心にした"低我"とつながっている。
本来は魂と一大心霊とは同一のものなのだから、
一大心霊とつながった"魂の意識"こそが
本当の自分自身なのだが、魂がまだ目覚めない
うちは、そこに気付けない。
"真我"が生命の中心でありながら
"低我"の意識に振り回されてしまうのだ。

⑦無苦集滅道

P306

しかし"真我"が"低我"に振り回される段階も
魂の目覚めに至る必然の過程なのだ。

一大心霊から分かれて肉体に閉じ込められた魂は
とりあえずは胎児の状態だ。一大心霊の全能の力を
内に秘めてはいても、それは眠ったままの状態だ。
それを眠りから目覚めさせる刺激が必要だ。

その過程として"低我"の肉体次元で感覚に目覚め
欲望の次元で感情に目覚め 理性の次元で
精神に目覚めてゆく。

すなわち"低我"とは魂を目覚めさせる"道具"なのだ。
"低我"を道具として、やがて"真我"が目覚めるのだ。

人間の外見的な進化を眺めると他の動物より
何がすぐれているかといえば、道具を自由に操れることだ。

P307

人間は道具を操りあらゆる物質を操り…
電気や磁気を操りついには原子までも操り始めた。

人間の生命の内なる力は存在するものすべてを自由に操る
能力が潜在しているのだ。
人間が作った文明はその一端のあらわれに過ぎない。

P308

逆に人間が道具や火に操られたらどうなる?
これはおかしなことになるのは当然だ!!
魂と低我の関係も同じこと!!

低我は魂を進化させるための道具だ! しかも、この道具は
意識を持った生き物だ! 肉体の感覚! 欲望と感情!
知性と精神…
三つの次元の三つの生命! それらの意識が集って
"低我"という心を作っている。
そして魂が目覚めぬうちはこの低我の心を"自分"と
思いこんでしまうのだ。しかしそれは本物の自分じゃない!

P308

生命の主人公は"魂"なのだ。!! 魂こそ"真我"なのだ。!!

真我が低我に振り回されている間はそこに限りない苦悩が生れ続ける!!

P309

魂が"低我"の心に振り回されるところに生れる苦悩!
それこそが"無明"そのものなのである。

その無明が"空"なる次元をめぐる時"生老病死"という。
肉体を伴う生命現象を作り出してしまうのだ。
すなわち
"六道輪廻"をめぐる生と死の限りない繰り返し!
これこそ、
"根源的な苦"と呼ばれているものの正体なのだ!!

P310

お釈迦様の説かれた"生存は苦なり"という"苦諦(くたい)の真理"の奥には実に、
こうした深い意味が秘められているのである。
要するに"苦諦"とは、
"生老病死"があるから"生存は苦なり"というような単純なことが苦諦の
意味ではない。
生老病死を伴う肉体という生命現象がそもそも空なる次元の
根源的な苦のエネルギーのあらわれである。という事。

根源的な苦のエネルギーは低我の持つ欲望と執着から
生れている。だからいつまでも低我が生命の主人公で
あってはならないのだ。

⑦ 無苦集滅道

P311

本当の主人公は"真我"すなわち"魂"だ!
人間はその魂を、生きているうちに
目覚めさせねばならないのだ。
それが出来ないうちは いつまでたっても
生と死の繰り返しから脱出出来ず
"苦"を土台とした肉体の中に閉じ込められたままなのだ

魂が目覚め始めると共に、意識は自然に
"低我"の持つ価値観から"真我"の"正見"(しょうけん)
へと移ってゆく。 → くわしくは八正道にてかいつ
真我が完全に目覚め切れば、もはや低我は
必要でなくなる。

そして、その時、魂は"低我"という"生命"のからを脱ぎ捨てる。
あらゆる執着の世界を脱皮する。
それが涅槃(ねはん)だ!!

魂はふたたび肉体の世界に戻ることなく、
一大心霊をめざしてさらに高いレベルへと進化してゆく…

☆ 集諦(じったい) P312

生存の苦は肉体につらなった欲望と感情がつくりだす
執着から生まれるものである → "集諦"の真理!

したがって煩悩をなくすにはまず執着からはなれること!

それが"低我"をすて真我にもどることであり、そこにおいて
魂は目覚める!

すなわち"無明"から脱し"苦"の根源をつくらず
"六道輪廻"のカルマも解消され肉体という
生命現象からはなれ魂は"涅槃"へと昇華する!

☆ 滅諦(めったい) すなわち、一切の苦の解消! それが滅諦の真理!

P312

☆ 道諦(どうたい)

P313

さて、そうした"いのち"の内なる戦いにおいて
のぞんで、真我の精神を勝利へと導く
具体的な道のりを教えているのが道諦の真理!!
別名"八正道"の教えだ。

⑦ 無苦集滅道

P313

道諦の真理 … 八正道

① 正見 —— 正しくものごとを見る。
② 正思惟 —— 正しく心を働かせる
③ 正語 —— 正しく言葉をつかう
④ 正業 —— 正しく行為する
⑤ 正命 —— 正しく生命を運ぶ
⑥ 正精進 —— 正しく努力を怠らない
⑦ 正念 —— 正しい想念と祈り
⑧ 正定 —— 正しい瞑想

P321
"八正道"の"正"とは、固定観念として通用している善悪の中の正しさではなく、"天の法則"としての真の正しさであることを、まず、心にとめることだ。
そして、そこから、八正道の他の項目も、全体的に理解しなければならない。

P315
正見とは、ものの表面を見ることではなく、内の問題。
要するに、正しく道理を見ること。
正しいことと正しくないことを正確に判別する事が
人が生きる上で最も大切なこと。

P317
ひとロに正しさとは言っても、その中に二つの意味の正しさがある。

一つは、世の中のルールとして通用している"善と悪"の観念の中の"正しさ"

二つは、"いのち"の霊的な進化へとつながった、"天の法則"としての"正しさ"

この"善と悪"の観念と"正と邪"の法則は似ているようで、
実は根本的に意味の違うもの！

P318
正と邪の法則とは"天の掟"ともいえるもので、"いのち"の進化を成り立たせる絶体絶命の法則！

善悪の観念は時代の変化や時の権力や人間社会の都合によって正しさの基準が変わる、いいかげんなもの

P318
実に、この人間の作った"善悪"の観念と、天の掟としての~~正邪~~"正と邪"の法則が
一致していないところに まさに解決のつかない不幸や悲劇が、
世の中に限りなく生まれる。

なぜ"善悪"の観念と"正と邪"の法則が一致しないのか？

P319
たとえば、"我意識"にとっては精神の向上とか進化などどうでもいいことで、
何より物質欲や金銭欲を満たすことが、現実的な幸せの道だと考える。

P320
人間の社会全体がそうした価値観の狂いを抱えており みんながそれを認め合うところから
うまれているのがルールとしての"善悪の観念"なのだ。

P321
天の法則は人間の我意識の都合に妥協などしてくれない!!
"正と邪"の法則は、あくまで精神の霊的進化の実現という目標に向かって動いている！

P321
したがって、人間の作った善悪の観念などに関係なく進化に反する思いや、行為
には軌道修正の力となって働きかけ、それが人間の運命の中に、苦悩や、不幸や、
災いなどの現象となって現れてくる!!

⑦無苦集滅道

しょうけん
正見　P322
何が真に正しく何が根本的なまちがいか?!
それを天の法則につなげて判別する能力!!
それが"八正道"の中心たる正見というのだ!

P322
したがって正見の目を開くには、まずゆがんだ
我意識から離れた精神の本質に目覚め
なければならず、それを実現させるのが
"般若波羅蜜多"(プラジュニャーパーラミター)
と呼ばれる瞑想の行!すなわち、それが
八正道の中の"正定"(しょうじょう)だ!!

P323
つまり、八正道は"正定"から始まって"正見"において
完成するのだ!

P324
その意味を説明しよう。
何度もいうようにほとんどの人が"真我"と"低我"の
意識を逆転させたまま生きているのだがそれがあべこべだとも
思っていない。何よりまずそこに気がつかないとどのようにしても
"正見"の目を開くことは不可能だ。

そこで"正しい見解"だとか"正しい考え""正しい行為"などと
誰が考えても、あたりまえのことにわざわざ"正"という言葉を
強調しそこから、意識がさかさまだよ!と
お釈迦さまは呼びかけておられるのだ。

八正道の順序がさかさまなのもこれと同じ意味を
持っている。

さらに八正道をうらがえしにして理解すれば
八つの"いましめ"と、なっていることに気がつく筈だ!

八つの正しいことをしなさい、ではなく
八つのまちがいに気付きなさいという意味!!

P326
正念　空なる次元の実感は今迄、体験したこともない
この上もなく奥深い感謝の心を起させる。

それは、まさしく魂が実感する感謝の心。

その純粋な感動は自分の心がさらに
清らかでありたいと願う。
それは、そのまま"祈り"につながる

この段階が"正念"だ。

正念とは正しい祈り!正しい思念!
如来の聖霊と自分の魂とのつながり
それを結ぶ思念が"正念"だ

自らの魂が神仏とつながっているという
この実感による発見はおおいなるおどろきであり、
同時にこの上ない喜びだ。
まったくの無神論者であった自分(作者)が
具体的に神仏を魂で実感した時、
そこにおいて人生観はガラリと変る。

⑦無苦集滅道

P327

正精進　そして、自からの"魂"をさらにたしかな目覚めと
するための努力が自然に自らの意志の中に
湧いてくる。
すなわち"正精進"！

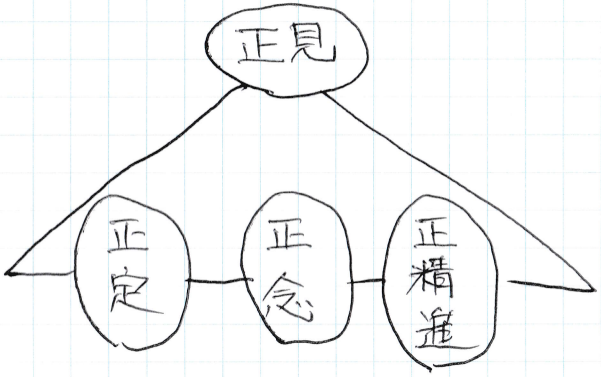
"正精進"において努力は苦通ではなく
喜びの中でなされはじめる!!

お釈迦さまは、"苦業は正しい修業ではない"と
云われたそうだ。たしかに苦業は苦痛だ！
修業に喜びがないというのは
修業と共にある魂が神仏とつながっていないからだ。

魂が神仏につながれば修業は喜びにかわる！
如来の聖霊を身近に感応出来るという喜びがあれば、
誰しも精進にはげむ！
"魂が求める精進"これが"正精進"の意味だ。

P329

このように
"正定"は"正念"によって成り立ち、
"正念"は"正精進"によって実現される！
そして、正定と正念と正精進によって
"正見"の目が開くのだ!!



P329

八正道の説明の、はじめにのべたように、
何が真に正しく何が根本的な間違いか!?
それを見極める理智の目が
"正見"といわれているものだ。

正見は八正道の中心であり、正見なくしては、
八正道の他の項目のすべてが成り立たない！

なぜなれば!!
八つの正しい道ともいうけれど、その正しいという言葉の
根本的な意味あいさえもが正見の目を開かなければ
正しく理解できない！ということなのだ。

⑦無苦集滅道

P330
正思惟 ‥ 正しい心とはどういう心か？

正語 ‥ 正しいことばとはどういうことばか？

正業 ‥ 正しい行為とはどういう行為か？

P331
世の中を見わたしてごらんよ！
人と人とのいさかいや、誤解や、憎しみや、
あらそいなどの災いの元をたどれば…
みんな、まちがった心と、ことばと、
行為の中から生じているのよ！

それというのも、"善悪"の観念というものが
根本的な所で狂ってるからよ！
これじゃあ、世の中ひっちゃかめっちゃかに
なっていてあたり前!!
そこに生きるわれわれみんなも、
苦悩のたえないのも、あたりまえ！

そこで、まず何より、日常の心とことばと行為の
真の正しさはどこにあるかを見きわめることだ。

形式的な善悪の観念ではなく、"いのち"の
霊的進化につながる"正邪"の法則につながった
正しさの意味を知ることだ！

正思惟

P332
[30]
2024.3.5

まず"正思惟"だが自分中心の我意識からは
真の正しい心というのは望めない！

"我"の意識そのものが精神の霊的な進化とは逆の方向に
むかって働く意識だからだ。

精神より欲望と感情が中心となり、好きか嫌いかが
先行し、正しいか正しくないかは問題じゃない！

正しいことを好きになる！というのが精神本来のありかたなのだが、
我意識の感情というやつは、自分の好きだと決めたことに
あとから"正しさ"をこじつけるのだよ！

つまり、やることがさかさまなのだ
それも"我"という意識が進化の法則に逆行して働いているからだ。

P334
大切なのは心のかしこさだ!!

頭ばかりがいかに賢くても、心のかしこさがともなわないと…
その人間の性格はいやな角度にゆがんでゆく!!

心のかしこさが頭脳の発達に追いつけないところに、
自分本位の我意識が強まってしまうのだ！

自分本位の"我"の意識からはなれて、人を思いやる心。
それが"慈悲"の心であり"愛"の精神だ。

そうした精神が土台となった心の世界が"正思惟"なのだよ。

⑦無苦集滅道

P335
正語

"正語"も"正思惟"につながったものだ。
"正思惟"が実現されれば、おのずと
"正語"も実現されてゆく。

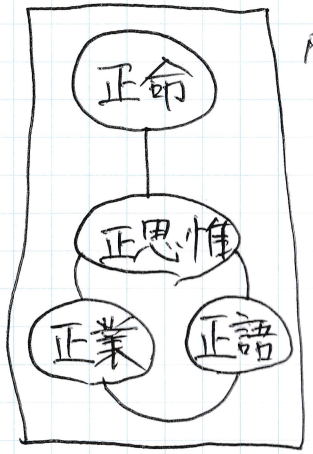
たとえば、あることがらについて
人と人とが話しあうのは常にあることだが、
そうした時…
いかに話の内容が正しく筋道の通った
話であろうと、相手を言い負かそうとする心が
ことばのウラに働いていたのでは、それは
"正語"にはならない！
なぜなら、相手をやりこめようとする心が
すでに"邪の心"なのだから
そこから発せられることばは
"邪の心"を表現しているわけだ
邪の心をいかに正しく表現したところで、
それが"正語"であろうはずがない！

P336
相手の心を刺し貫くことば！
相手の心を打ちのめすことば！
相手の心を切りきざむことば！

ことばは物質ではないが、人の心や精神に、
致命的な傷を負わせる凶器にもなる!!
相手をやりこめようとする話の内容が正しければ、
正しいほどかえって強力な武器となり
やりこめられる方としては、反論もできないと
感情的になり、ことばをヌキにした暴力に出たり
することにもなってしまう。

P337
ことばを話すということは、自分の心を"音"にかえて
発していることだ。
人がことばを聞くとき、人の心を"音"として受とっている。

要するに、ことばによって、良い結果が実現されいやなことがらが消えてゆく…
そうしたことばを"正語"というのだ。



P337
正業

正業とは、正しい行為ということだが…
~~正しい行為~~
これも正思惟と連っており、正語と同じ条件のものだ。
ただ"行為"というのは、心やことば以上に、
はっきりとした結果につながっている！

P338
心だけに悪意を持つより、ことばだけで人をののしるより、
具体的な行為において人に害を与える方が、
災いもはるかに大きい！

しかも、そこにはいやもおうもなく、進化の法則通りに、
悪のカルマが形成され、いずれは何らかの形で、
本人の運命の中にその結果があらわれてくる！

したがって、ここにおいても、まず何より、真に正しいことは
どういうことか？
何が根本的に天の法則に反することかの判断が、
大切なこととなるわけだ。

正命

P339
さて、このように人間は心とことばと行為によって
自らの運命を形成してゆくのだが、その総合的な
正しさが"正命"だ。つまり正命とは正しいいのちの運びということ。

そもそも、この世の宿命としての"苦"というものは、"いのち"の霊的な
進化に必要な原動力となっているものなのだよ。

人間がこの世に"いのち"をあらわすということは宿命としての"苦"の中から
真の正しさに目覚め、霊的な進化とともに、その苦を"快"へと
変えてゆく能力を身につけてゆくことなのだ。

それは、この世に生きている中で、運命にふりまわされる
状態から、運命そのものを、自らの力で操作してゆく
状態へと、進化してゆくことでもある！

⑧ 無智亦無得 …

P340

こうして、この世の精神がある進化のレベルに達すると、
その"いのち"の条件は苦に満ちた物質世界の
宿命から解き放たれ、この世を超えた霊的な
"いのち"となって、さらに無限の進化の次元へと
進んでゆくのだよ。

⇩ それを表現したことばが 以下の経文

無智亦無得 …

P342

要するに、
私達の苦悩や不幸の根源は、実は、
自分自身の意識にあるのです

その意識が、まるで逆さまに働いているのに、それに気付かない!

そこから世の中全体の中に限りのない苦悩と不幸が
実体化されているというのに、それにも目が開けない!!

そこで、まず何より、この霊的進化の力に反する
自らの逆さまの意識の状態に気付かなければならない!
そして、その、逆さまの意識の働きを、精神本来の
正しい意識にもどさねばならない!!

遠離一切顛倒夢想 の意味

P343

人間の霊的進化とは、
まこつかたない幸福の実現だ!
それは、生と死を超えた
彼方(かなた)の次元にまで続いている!!

人間の霊的進化の方向!
それが"究竟涅槃"(くきょうねはん)と表現される、
無限の進化への道のりだ。

幸福の実現 → 究竟涅槃

その道へとすすむ第一歩として、自らの意識を逆さまのままに
しておいてはならない!! と
お釈迦さまは経文の方便で、われわれに忠告されている
のであります。

⑨ 三世諸仏 …

P344

偉大なるすべての仏もはるかな過去においては
われわれと変わらぬ低いレベルの"いのち"として
生きていた時代もあったわけだが …

そこから霊的進化の実現を果たせたのは
"般若波羅蜜多"という進化の理智によってだ!!

P345

そして、その理智の内容というのが
"阿耨多羅三藐三菩提"(あのくたらさんみゃくさんぼだい)と
いわれているもの。

原語は、"アヌッタラサムヤックサムボーディ"
音訳して漢字にあてはめた。

無上最高の悟りと訳されている。

だが、何が無上で、何が最高の悟りなのか、まったくわからない。

P346

実は、人間全体の"魂"の次元には"アーカーシックレコード"と
呼ばれているものがあるのだが …
それは空なる次元の、いわば知恵の情報庫のようなもの。

そこから人間の瞑想意識の中に伝えられてくる
進化への理智が"般若波羅蜜多"であり、そして、
その真理のすべてに到達した状態が無上最高の悟り、
すなわち"阿耨多羅三藐三菩提"ということなのだよ。

P347

われわれの、今の精神の進化のレベルでは
"神"といわれているものの意味あいが、あまりに深すぎて
はっきりとは、とらえられない。

しかし、現実に人間の精神を進化へと導く神秘の力が
常にわれわれに働きかけており、その力によって、
人間の精神はこの世から、この世を超えた神の次元へと進化してゆく!!

その神の次元と人間の精神をつなぐものが"般若波羅蜜多(プラジュニャーパーラミター)"という、
進化に導く"理智"であり、その進化の実現において、それぞれの"いのち"の
真理と一体となった状態こそが"阿耨多羅三藐三菩提"と
いうことなのだよ。

⑩ 故知般若波羅蜜多…

アヌッタラサムヤックサムボーディ　阿耨多羅三藐三菩提

いのちの根源的真理　P354

プラジュニャー　パーラミター　般若波羅蜜多

純粋意識

P348

故に知るべし！
般若波羅蜜多の大いなる咒、悟りの咒、
無上にして無比の咒は、
一切の苦を除くものなり!!

訳文

世の中は、実にさまざまな"苦"が満ちている！
そうした苦悩の一切が"般若波羅蜜多"の"咒(じゅ)"
によって　とり除かれてしまう！

というのだが…

P352

実は、そこに方便が秘められていて、
その方便を見通すところに"いのち"の真理を解する
"理智"が目覚めてくる！
すなわち、"プラジュニャーパーラミター"
その理智こそが"般若波羅蜜多"なのであり
それがすべての"苦"の解消のカギとなるのだ!!

"咒"そのものが"苦"の一切を除くのではない！

"咒"の方便から苦の宿命を解消してゆく知恵が生まれるのだ。

P353

是大神咒（これぞ神の次元につながる咒なり！）、
是大明咒（これぞ悟りに至る咒なり！）、
是無上咒（これぞ最上の咒なり！）、
是無等等咒（これぞくらべるものなき咒なり！）

} 咒

…と、くどいぐらいに"咒"を讃美しているようにも読めるのだが、その
くどく見える表現こそが咒に秘められた意味の深さをあらわしているわけだ。

P354

瞑想による純粋意識の中に湧き出る"般若"の理智。
それによって、この世の根源的な"苦"の成り立ちと
その根本的な意味あいが理解できる。
その理智が、さらに育てば"無上完璧な悟り"へと到達し、
その"いのち"は、まさに一切の"苦"からはなれた
霊的進化を完成させる！

そこに導くための限りなく深い意味を"咒(じゅ)"に秘めて表現する！
それを方便のことばで言いあらわしたのが
咒という経文なのだよ。

⑪ 真実不虚 … 即説呪曰

P355
真実にて いつわりのない
般若の理智によって説かれた呪。
その呪は、即ち、次の如し。

P356
だからこの"呪"は人間の知恵ではなく
仏の智慧(ちえ)から生まれているのだ!

人間レベルを超えた理智を使って
誰でもがスムースに空の瞑想が
実現出来るようにと工夫されているのだ。

P357
そくせつしゅわく
即説呪曰　　即ち呪を説いていわく…

↑ 揭諦揭諦へのうながし句

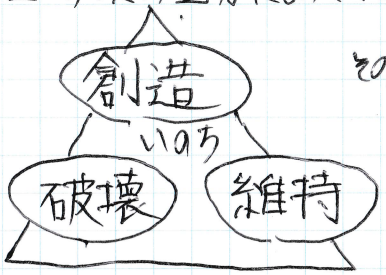
® PROJECT PAPER

⑫ 掲諦掲諦 …

P357 ガティー　ガティー　パーラガティー
P362 往きて　往きて　彼岸へと往きて
掲諦 掲諦 波羅掲諦
パーラサムガティー
まことく彼岸へと往きて
波羅僧掲諦

ボーディ　スヴァーハー
悟りよ、成就！（言葉でいいあらわせない幸を！）
菩提薩婆訶
莎

P372 地球上のすべての生命が、
Ⓐ三つの頭の霊力によって、出現し、存続し、進化してゆくのだ！



その三つの根源的霊力が、三位一体と呼ばれる神の力の基本の要！ すなわち、創造、維持、破壊だ！

P362
般若心経の呪は不翻にされるべきもの！と言われている。

訳しても意味がわからない。

P369
スヴァーハー（僧莎訶 薩婆訶）の
もともとの意味は、インド神話の"火神アグニ"の異称であったという。

アグニ（Agni）は　あぎに（阿耆尼）とも呼び
天界のインドラ、空界のスールヤ、地界のアグニによって
インド神話は、神の三位一体のあらわれを表現しており
すなわち、火神アグニとは生命の原動力そのものの地界の神だ！

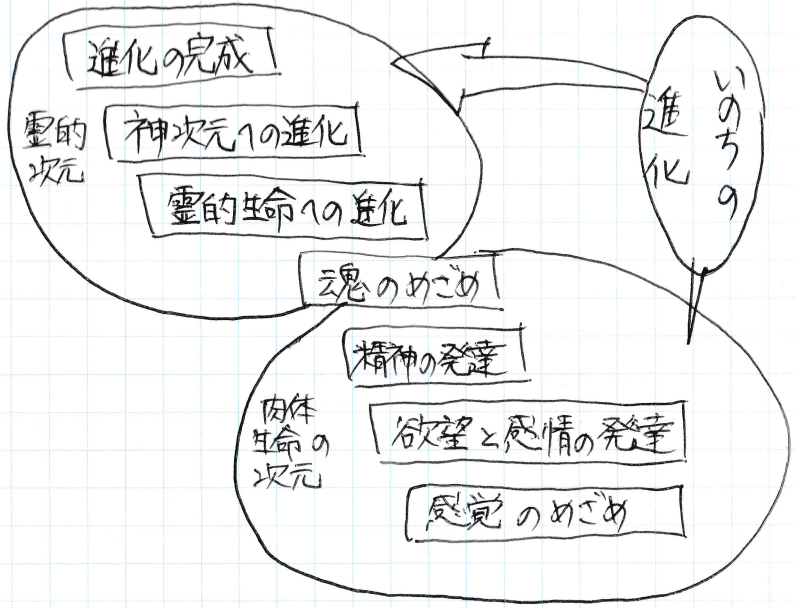
P369 火神アグニ　その姿はⒶ三つの頭にⒷ七つの舌、千の眼を持ち
不浄を焼き払い、暗黒を照らす！

P370 ただ、アグニのその姿は迷信で別の意味の表現。

P371 火神アグニの三つの頭とは…それは
生命の根源的な原動力としてはたらく
三つの要素のことだ！（①②③）

P373
Ⓑ七つの舌は、まず"七"という数字は"いのち"の霊的進化の七段階につながっている！

まず、物質世界の肉体生命の"感覚"の進化から始まり、"欲望"と"感情"の発達、
"精神"と"魂"のめざめ、こうして"いのち"の進化は人間以上のものへと進み、
七段階目において、霊的な進化の完成に至る！



P373
これらの霊的進化への第一歩に、人間はこの世において、"チャクラ"というものに目覚めるが、その"チャクラ"の数もまた七つなのだよ

P371
①天界の太陽（プラーナ）…"生命素"とも呼ばれていて、太陽光線とともに、常に地球に注がれており、あらゆる"いのち"の基本的な"活力"になっている
②空界の電光（電気・磁気）…生命体の働きとともにある！
③地界の祭火（クンダリニー）…"色の世界"と"空"の次元をつなぐ神秘の力 P377
P377

⑫ 揭諦揭諦 …

P374
"チャクラ"は、瞑想の行をつむとともにあらわれてくる。

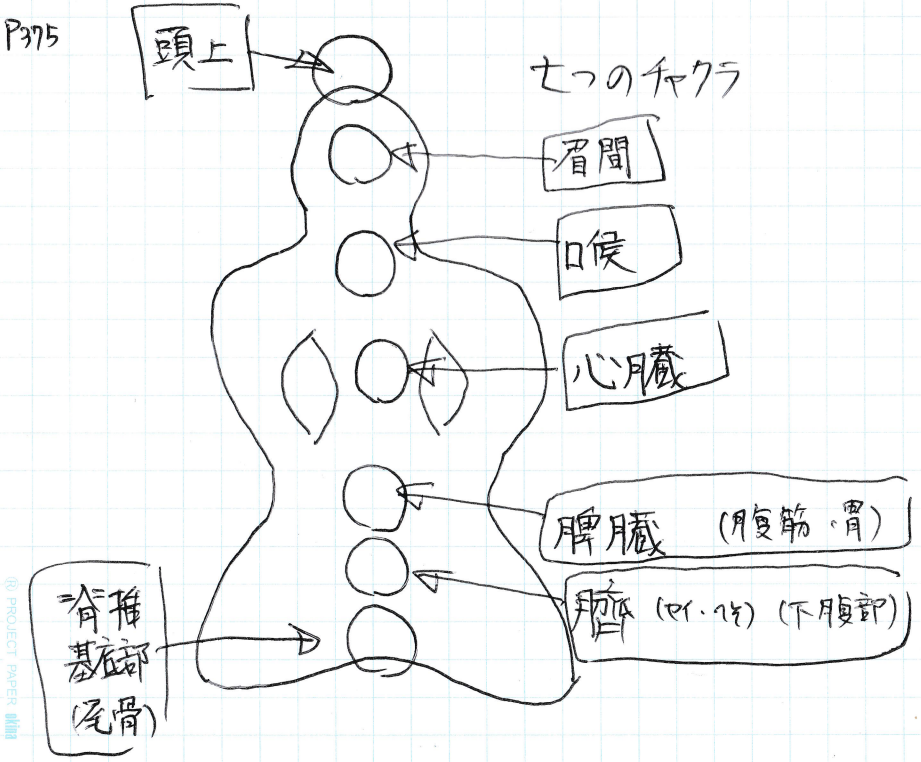
チャクラとは、瞑想の時、閉じたまぶたのウラ、
ひたいのあたりにあらわれてくる光の輪だ。
それがはっきりとする時、たくさんの花べんを持つ、
光のハスの花のような姿となる。

それは、霊的次元の"いのち"の内なる働きが
視覚的な意識となってあらわれているのだ。

そのチャクラは、肉体の器官とは、また別の霊的次元の
身体の機能で脊椎の基底部から頭上部にむかって
七つあり、霊的次元の"いのち"の活力を肉体生命の次元
へとつなぐ、それぞれの働きをしている。

"いのち"の根源的な活力である"プラーナ"もこのチャクラの
働きを通じて"いのち"の内部へととり入れられるのだよ。

P375



P376
さらに瞑想がすすむと、"クンダリニー"という神秘的な現象があらわれてくる!

"クンダリニー"とは、太古から、"とぐろを巻いた蛇"によって象徴されているが、
それを"火の蛇"とか"火のような力"とか"世の母"とか、いろいろに呼ばれている。

P377
クンダリニー

クンダリニーは色の世界と空の次元をつなぐ神秘の力だよ

その感じというのは瞑想中、突然、息も止まる不思議な圧力が
全身にみなぎり、その強力な圧力が、不思議な快感をともなって、
腰骨の底辺から背筋をラセン状に渦巻き上り、首筋を通り抜け、
頭がいの頂天に達し、そこで金色の光となって飛び散って行く!!
その感じは、まるで金色にかがやく龍神が大地から湧き上り、
自分の体内を通りぬけ"空"なる次元へと渦巻き上がってゆくが如くだ。

P388
"般若心経"に記されていることばの方便も、外からの知識だけでは
解読できるものではない。
理智のめざめを通してはじめて明らかになってゆくのだ。

P389
その"悟りの理智"の目覚めに至る具体的な手段が瞑想の行なのだよ。

P389
瞑想こそが、人間がこの世に生きつつ空なる次元に感応する、
唯一の方法だからだ。

P390 般若心経の読経がある音律を持っているのも、
その音律をとおして、
人の意識を瞑想世界へと導いてゆくためだ。